

## 巻頭言

今年度も、『教育論叢』第58号を無事にお届けすることができた。本誌には、2本の研究論文と6本の研究ノートが掲載されている。今年度は9名の執筆エントリーがあり、うち8名が無事に論稿を書き終え、掲載に至っている。

『教育論叢』は、名古屋大学の教育発達科学研究科教育科学専攻院生による研究創造活動の集大成として位置づけられ、院生間の討議を踏まえることで掲載する論稿の質の向上を図っている。例年執筆者の減少が見られる『教育論叢』ではあるが、今年度は9名と例年よりも多くのエントリーがあった。検討会や個々の執筆活動への取り組みの様子を見ると、研究創造活動に積極的に取り組む様子が見て取れたように思う。一方で、検討会に出席する大学院生の数の少なさという点では、依然として十分改善されているとはいえ、課題として残されている。これらの課題については、編集委員長である私自身の力不足でもあるが、「教育発達科学研究科教育科学専攻院生による研究創造活動の集大成」ということの意味を、所属院生全体で考える必要があるのかもしれない。

『教育論叢』の役割は、執筆者が検討会を経て自身の論稿・研究の質を高めるというだけに留まらない。執筆者以外の院生についても、検討会での報告を聞き、相互に検討・討議を行うことを通じて、各々の研究技量を向上させる役割も担っているのである。それゆえ、『教育論叢』を発行するまでの過程で、院生の主体的な活動を通じて充実した検討・討議が行われるのならば、それは執筆者のみならず教育科学専攻の院生全体の力量を向上させることにもつながりうるものである。

検討会への出席状況が問題として認識されている近年の様子を見ると、『教育論叢』はその役割を十分果たしているとは言い難い状況にあると言えよう。しかしながら、こうした状況が、教育科学専攻における院生の研究活動が低迷しているということを示しているというわけでは、決してないように思う。確かに大学院へと進学する学生の志向や性質には変化があると思われるが、それでも院生一人ひとりが自らの研究テーマに向き合い、日々活発に研究活動に取り組んでいるのではないか。そのような所属院生が個々の研究に向かうベクトルを、少しでも『教育論叢』の検討会・院生間での研究交流へと向けることができれば、教育科学専攻における研究活動も盛り上がっていくのではないだろうか。『教育論叢』編集委員会としてもそうした方策を模索していく必要があろう。

なお、本誌に掲載された論稿は、いずれも大学院生相互による複数回の検討を経たものである。検討会は少人数の会もあったものの、参加者相互の議論は活発に交わされていたように思う。ぜひ手に取って読んでいただき、読者の皆様のご批評を賜ることができれば幸いである。

2015年3月

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻  
『教育論叢』第58号編集委員長

濱口 輝士